

1 目的

本県の高齢者施設におけるアート作業の導入方法と作業実態、効果、および今後の展望と課題を紹介

高齢者施設でのレクリエーション

- ◆脳トレ
計算・書き取り・パズル等→脳の可塑性に注目 ⇒ 認知機能の改善期待
- ◆アート作業
折り紙・ちぎり絵・ぬり絵等→楽しみのため? ⇒ **効果不明**

先行研究

- 高齢者、要支援・要介護者を被験者とする研究が少ない
- 評価指標が主観的（被験者の感想など）
- 欧米の事例は年齢層が低い（55歳以上など）
- ランダム化されておらず効果が不明瞭

2 方法

徳島大学病院生命科学・医学系研究倫理審査委員会（申請番号4161）承認

検査時期

開始前 6週後 12週後

研究期間 12週（アート作業24回）

◆評価項目（両群共通）

HDS-R	IADL	Vitality Index	Barthel Index
GDS15	握力	ピンチ力	心理的幸福度

脳MRI（BAAD解析）可能な場合のみ開始前・12週後に

※心理的幸福尺度にはRENTZ C.A.が2002年の論文で発表したアートセッション中の評価指標を用いている。

◆場所：
介護老人保健施設「敬愛の家」（板野郡北島町）

◆被験者：
通所介護利用者のうち、75歳以上の後期高齢者40名（現在17名終了）
※79~98歳 M2+F16名

層別ランダム化 (randMS®)

◆アート群（A群）
通常のリハビリテーション＋レクリエーションプログラム＋マスキングテープアート作業（週2回30分）

◆コントロール群（C群）
通常のリハビリテーション＋レクリエーションプログラム

・年齢 75~89歳 / 90歳以上
・性別 M / F
・認知機能 HDS-R ≥21点 / <20点

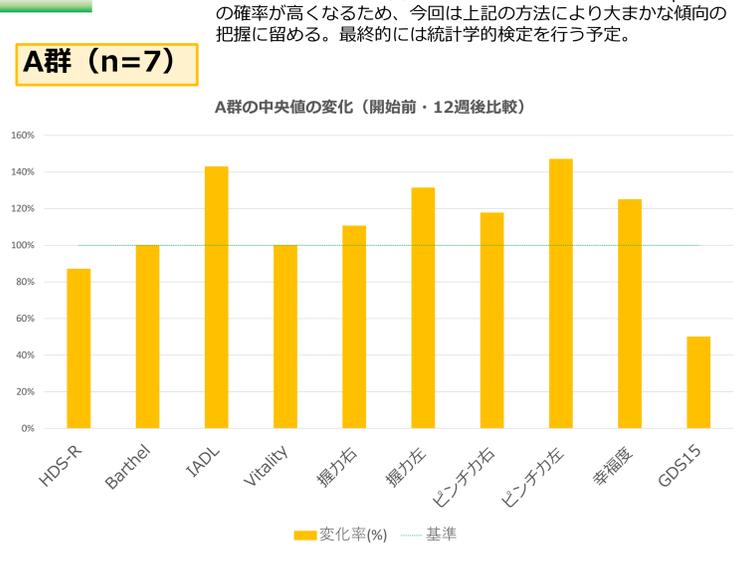
◆場所：
介護老人保健施設「敬愛の家」（板野郡北島町）

◆被験者：
通所介護利用者のうち、75歳以上の後期高齢者40名（現在17名終了）
※79~98歳 M2+F16名

3 研究の実際と途中経過

評価結果

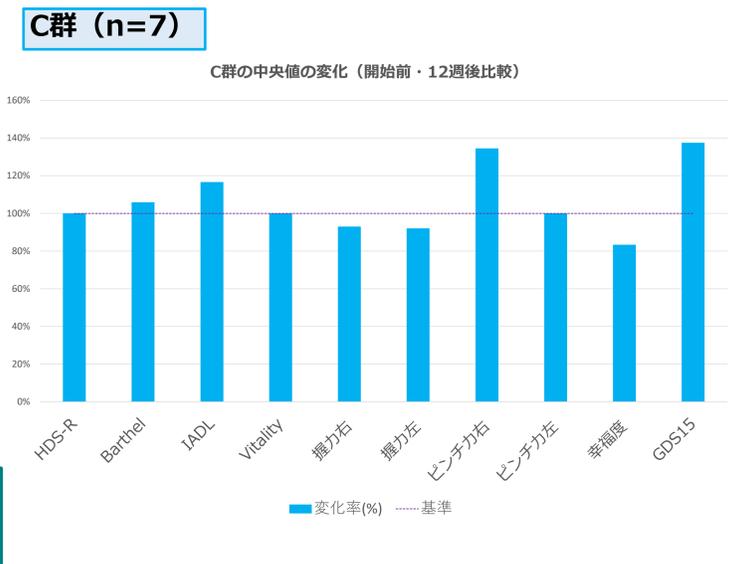
各評価項目につき各群の中央値を求め、開始前と12週後の変化率を算出



【A群の傾向と考察】

2項目で維持（100%）
 2項目で増進（111-118%）
 4項目で顕著な増進（125-147%）
 2項目で減退（50-87%）

- ・握力・ピンチ力（特に左 131%;147%）の増進は両手でテープをちぎる効果か。
- ・幸福度(125%)の増進はコミュニケーションが促進されたことが影響か。
- ・GDS15の減退はコロナ禍によるアート作業の中断と関係か？



【A群被験者の様子】

- ・回を追うごとにテープの使い方に独自の工夫や上達が見られた。
- ・他の人の制作を褒めたり自身を謙遜するなど、被験者同士のコミュニケーションが活発になった。
- ・作業中以外も作業の話をしたり、自宅でも話題にしたり、あらかじめどう作るか考えたりすることがある。
- ・展示されることを喜んでおり、作りがいがあると述べている。

【問題点】

- ・離脱者3名（入院、死亡、理解不能による拒否）
- ・コロナ禍による中断（約2週間）、欠席
- ・入浴時間、気分、体調が一定しない

現場での研究の難しさ

【C群の傾向と考察】

6項目で維持（92-106%）
 1項目で増進（117%）
 2項目で顕著な増進（134-138%）
 1項目で減退（83%）

- ・ピンチ力右(134%), GDS15(138%)の伸びは要因不明

4 結論・課題

- ・マスキングテープアート作業は握力・ピンチ力をはじめ、後期高齢者の身体機能を高める効果が期待できる。
一定期間ごとに異なるモチーフを作るため、多様な手の使い方が求められ、作業療法的役割を果たしている可能性も。
- ・マスキングテープアート作業は心理的幸福度を高める効果が期待できる。
作業同士や職員、他の利用者とのコミュニケーションが増え、褒められたり、自身の作業にやりがいや誇りを感じられる。

【課題】

- ・高齢者施設においては一定条件下で安定的に「研究」を続ける難しさがある。
被験者の諸条件、現場のスケジュールが不安定
- ・評価指標の妥当性
要支援者・要介護者には不適當な項目もあり。米国由来の幸福尺度は日本人には馴染まない項目も。
- ・被験者数の少なさ
客観性を高めるべく今後増やして継続していく必要。

筆頭演者、共同演者において、開示すべき利益相反(COI)はありません。